

土や草を喰う犬 -2

JSRC副理事長 五味靖嘉

少し前のことになるが、「土を喰う犬」の紹介の中に、以下のような文章を書いた。

“1993年10月生まれの雌犬「フウ」と呼んでいる当年12歳のこの犬は、ここまで医者知らずに、全てにおいて健康で過ごしている。寄る年波には勝てず、近頃は視力が衰え、眼球が濁り始めた。しかし、嗅覚・聴力は一番で、何事もいち早く感じ取るという鋭敏さを備えている。言うまでもなく皮膚病など一度も経験がないし、蚤やダニ、寄生虫などで飼い主を困らせた事もない。”

この記事を書いた後に、中村一恵先生から、「動物たちの自然療法—野生の知恵に学ぶ」シンディ・エンジェル著（紀伊國屋書店・2003刊）を紹介していただいた。その文献に、「土を食べて毒を消す」「食べる土を選ぶ」という見出しがある。その中に、植物を多く食べる動物には二次化合物の解毒と関係があり、特にナトリウム不足と関係があるのではないかということが書かれてあった。それからもう10年余りの年月が流れ、このテーマは書こうと思いつつも今まで中々書けないでいた。

「土を喰う」ことは、地球上では様々な例があり、また各国に見られるようである。テレビなどでも放映された、野生動物のゾウやシカなどが、危険を冒してでも土を食べる事が知られている。人間の場合では、伝統的な暮らしを守っているオーストラリアや東アフリカ、中国、西洋などで、妊娠した女性に見られ、古くは人類の祖先たちにもあったようである。

下痢治療や胃腸障害など、解毒作用やナトリウムなど様々なミネラル補給にも効果があり、名前を変えて人の治療薬剤にもなっている。その有名な物質の一つは免疫抑制薬として、1984年3月、茨城県筑波山で採取した土からタクロリムスを作り出す放線菌を発見したことである。また、土壌に関する分野で微生物は新しい薬の宝庫として、様々な開発が進められている。

体調の良い犬は、草・土など食べない・迷信だ！と言う専門家の文献も見かけます。しかし、体調が良いから食べないのではなくて、体調を維持する上で祖先から受け継がれている、と理解したほうが自然である。縄文柴犬は塩分を求め、排尿を舐めることがあるし、外科的な傷の治療として、良く舐める事を繰り返す。唾液に含まれる殺菌作用で、一般的に知られているのは

ブドウ球菌、大腸菌、連鎖球菌などの抗菌物質が含まれ

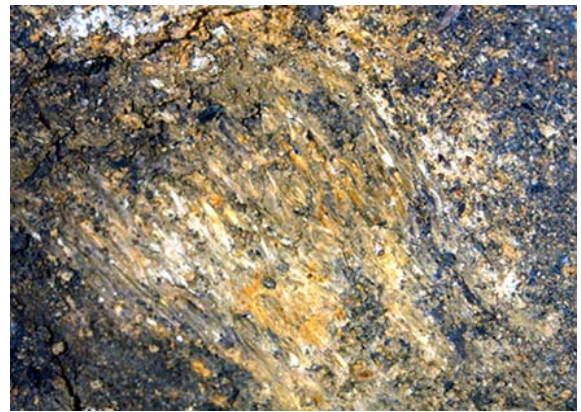


健康な犬フウ ↑

フェンスを登る

↑

↓フウが食べたのは鉄分が多く含まれる粘土層



ている。

身近な植物、ドクダミ（ドクダミ科ドクダミ属の多年草）などは、人の整腸剤とか食材として昔から活用されていたが、これはイヌも好んで食べる漢方薬である。イヌが様々な草を食べ（ここではイネ科などを念頭に）、胃の中のを吐き出す事もあるが、ナトリウム不足とも関係があり、下痢の症状も病原体や毒を取り除く作用がある。縄文柴犬を観ていると、体調が優れない様々な理由がある時は自ら、絶食し、ひたすら休息をして保温し、自然治癒力に専念する（例：マムシに咬まれても同様の行為が観られる）。彼らが、時に嘔吐をするのも毒や病原体を排出する反応行為（それとは別な理由もあるが、ここでは省略した）であり、これは長い歴史の過程で、野性的・原種的に自然淘汰され、その結果、遺伝的に備わっているからであろう。

(2014. 10. 25)